
鋼の魔導師 Stahl Zauberer

Schwert

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鋼の魔導師 S t a h l Z a u b e r e r

【Nコード】

N O 1 4 1 Z

【作者名】

S c h w e r t

【あらすじ】

海鳴市に移り住んで来た9歳の少年天道シュウは平穏な学校生活を送っていた。

それから数ヶ月後・・・唐突にそれは破られた。夕暮れの中、突然襲われ、ひよんな事から巻き込まれ闇の書に関わってしまう、そこで出会った少女達によって更に面倒な事になって行く。

他人より少しお金が好き少年が送る魔導師のお話し。はたして彼はお金より大切な物を見つける事が出来るのか!?

闇の書編 第1話

この街、海鳴に越して数ヶ月が経ったある日の放課後、夕飯の買い物帰りにいきなり周囲から人が消え、空は綺麗な夕陽から幾何学模様に変わっていた。

・・・うん、変わっていた。そして目の前には何時の間か居た桃色の髪をポニーテールにした女性、その手には片刃の剣が握られている。

「お前の魔力を頂く」

無表情で剣を振り上げながら言うセリフは少し怖いよ。

「・・・いきなり何ですかアナタは、辻斬りですか？何時の時代の方？」

問いには答えず手に持った剣で斬りつけてきた。

あゝあれかお話し出来ない人なのかなっ！袈裟切りの剣を後ろに跳びそれを避ける。

“《マスターあの者魔導師ですぞ剣もデバイスです》”

胸に提げているペンダントからの念話に返答える。

“うん、分かったあんな事だから逃避したかったのに・・・だ
ってこれ結界だね・・・ねえ俺達何かやったっけ？”

“《どうでしょう『魔力を頂く』と言ってましたので恨み等ではなさそうですが。で、どうしますか？逃げるにしてもこの結界なかなか硬そうですぞ》”

先程から聞こえるこの渋い声は俺の相棒の『シュタールファング』2年程前に爺さんから受け継いだデバイスで何気に年上だったりする。

“そうなんだよね、逃げとも追ってきそうだし、お話しも出来ない気がするよ”

女は更に距離を詰め剣を上段から叩きつける。

左に身を捻り腹に蹴りを叩き込むが後方に跳び避けられた。

「ほう！子供がこれを避けれるのか。この間の者といい昨今の子供は侮れないな」

さつき迄無表情だったのに今は嬉しそうに微笑っている！

“面倒なのはイヤなんだけど・・・結界はこの人潰してから考えるよ”

「シュタールファングSetup」

《Yes Matter》

鈍色の光に包まれ服装が変化する。黒のインナーに同色のパンツ、足首までのブーツに腰までの長さの灰色のコート、左腕に鎖が巻きついている鉄甲。両脚には脛までの脚甲が装着され左腰に刀が差されている。刀がファングの本体で鏢には黒色の宝石が付いている。

「それはデバイス！魔導師だったのか、この街はつくづく面白い・・・だが、我等には時間がないのでな悪いが直ぐに終わらせてもらう」

そう言い放ち剣を構えこちらに跳んでくる。それを迎え打つ形でファングを抜き、そして刀と剣が打ち合うカン高い音が響き渡り火花が散る。

ファングを左下から切り上げ、女は剣を盾にし弾く。

その勢いのまま腹に向けて右薙に振う。

ジャケットを切り裂くがぎりぎり回避され浅くしか切れなかった。

「くっ！レヴァンティン、カートリッジロード」

《Explosion》

剣と鐐の間に弾丸のような物が入られ剣に紫色の炎が纏われる。

「ファングこれってなに？」

《珍しいですね、私も久しぶりに見ました、ベルカ式カートリッジシステムですねやはり彼女はベルカの魔導師、いえ騎士です》

「・・・ああ爺さんから聞いた気がするけどこれがそうなんだ」

《一応マスターもベルカ式ですけど》

ファングにはカートリッジなんてないし忘れてた。とりあえず、んな話してる場合じゃないね。

「フアング、往くよ」

フアングを鞘に戻し抜き打ちの構えでこちらにも前方に跳ぶ

「紫電一閃」

《Z u f f r i e r e n》

「凍牙・一刃」

こちらの居合い斬りと女の唐竹からの一撃がぶつかり、その魔力の余波で俺のコートが腕から肩口まで吹き飛び女もガントレットが破壊される。

・・・いつ痛あ！俺の方がダメージが多くないかな？

《まあ魔力量ではあの騎士殿の方が数段上ですからこうなるのは当然ですぞ、と言うより相手にダメージが通った事が僥倖というものです。あなたは魔力量は一般的ですから魔力押しではあなたが潰されるですよ》

そうなんだよね、さあどうしようか。

「ここ迄とは思わなかったぞ、我が名はヴォルケンリッターの将シグナム。そして我が剣『レヴァンティン』」

《D a n k e》

「名を聞こう」

「……えっと、突然自己紹介っておかしくないかな？」

「《ほらマスター相手が名を聞いたんですからキチンと応えるのが礼儀ですぞ》」

「そういうものなの？」

「《シグナム殿はあなたを一応でも認めているんですから》」

一応って余計じゃないかな、まいっか。

「俺は天道シュウ……特に言う事はない」

《そして私は＜鋼の牙＞シュタールファングです。済みませんシグナム殿この人、人見知りで禄な挨拶が出来なくて、何時も言っているのですが》

「うっさいお前はお母さんか!？」

《どちらかと言えばお父さんです。私は男性ですから》

「天道にシュタールファングか、では征くぞ」

「……シリアスを貫くねこの人、ファングの所為で若干グダグダになってるのに。」

でも段々楽しくなって来た。こういう戦いは久しぶりだからついワクワクしちゃうね。

《マスター楽しいそうですね。

ロードからもそういうのは控えろと言われていますが》

ファングは先代のマスターである爺さんの事をロードと呼んでいる。

「爺さんには言われたくないんだけどな」

《そうですねロードも本当に楽しそうに戦いますから》

・・!? 突然人気のなかった周囲に一つの気配が生まれそして・・

《Stinger Ray》

数本の青いスフィアが俺とシグナムに向かった来た。

こっちに飛んで来たスフィアを全てファングで切り裂き気配がする方を見ると、俺と同じ黒い髪に全身黒の服を着た同い年位の男が居た・・つか黒づくめだねコイツ、そして魔導師だよね浮いてるし手にも杖、デバイスっぽい持ってるし。

《おかしいですね、ここは管理外世界の筈ですが》

「そうだね、何でこんなに魔導師がいるんだろうね」

「そこ迄だ、管理外世界での魔法行使は禁止されている。直ちに武装を解除し投降するんだ」

「・・というよりいきなり出て来たおのれは誰? それにおのれも使ってたよね?」

「くっ管理局か!？」

どうもシグナムは顔見知りらしいね苦い顔してるけど、でもさっきからこっちの問いを全部スルーっておかしくないかな会話のキャッチボールしようよ。

「闇の書の守護騎士シグナム、ロストログア不法所持の容疑で拘束する」

そのままシグナムと黒い魔導師の戦闘が始まった。

あれ？俺は無視！何か知らない子みたいない扱いされてるし・・・もういいや！

“ねえフアング帰ろうか”

“《そうですね私達は空気読めますから。そうしましょう》”

感動？の再会をしている二人を背に帰ろうとすると。

「待て、君にも話がある帰ろうとするな」

何でこういうのは気付きやがるかな!？

「いやゝ二人共良い雰囲気だから俺達はお邪魔かと思って」

《そうですね我々は空気が読めるので後は若い二人に任せて退散しようとしただけですぞ》

「君は一体何の話をしている！僕は時空管理局、執務官クロノ・ハラオウンだ。君達も逃げようとするなら拘束する」



「艦長、何とか間に合いましたね。でもクロノくんだけで大丈夫なんでしょうか？守護騎士だけでも厄介なのに、あの男の子も何か戦い慣れているみたい何ですけど」

モニターに映る三人を見ながら話すのはクロノの補佐官のエイミィ。でもエイミィの言うとおり厄介ね、なのはさんやフェイトさんと変わらない位の子なのにあれ程の戦闘が出来るなんて。

「今、なのはさんとフェイトさんも向かっているから後少しで着く筈よクロノにはそれまで足止めしてもらえればいいわ」

「そうですか、それにしても」

エイミィが端末を操作すると魔力量を示す数値が出てくる。

「この子の魔力、精々一般の局員と変わらないですよね多く見積もってもBランク位ですよ、でも何でこんなに戦えるんですか？」

「多分魔力コントロールが上手いのよ特に魔力の圧縮ね、これに関しては異常とも言える位ね、だから先程も打ち負けてはいなかったのよ。でも本当に凄いわね・・・うふふ」

「艦長、またですか」

エイミーが何か言ってるけど、聴こえないわ。本局の増援も戦闘では余り期待出来ないしあの子も協力してくれれば・・



「お断りだ」

《どうしたんですか！？イキナリ》

「いやなんか妙な電波を受信して」

「だから君は何の話しをしているんだ！」

《ああ又ですか、たまにありますね》

「無視するな僕の話聴け」

何故か怒っているえーと黒いクロノだっけ、過去とか未来に行く人かな？

“《どうしますか？》”

“管理局には余り関わりたくないんだよ・・だからとっとと逃げよっか！何かもう2人程こっちに接近してるみたいだし”

“《えっ！？・・あゝ確認しました、確かに2人来てますな。相変わらずあなたはそういうのは得意なんですな》”

“まあね、ただ結界はシグナムが解除してもらわなきゃね”

未だに結界は解かれていないので、逃げるにしても結界が解除されないで逃げられない

“ねえシグナム聞こえる？”

というわけで直接本人に交渉する。

“・・・何だ”

あっ繋がった。

“アナタも局から逃げるんなら協力しないですか？”

“逃げる？管理局の者ではないのか？”

“局員ではないですよ余り関わりたくないんですよ局とは、協力してくれるんなら、コッチが合図したら光と音に供えておいて下さい。それと今こっちに2人程接近していますよ。恐らく局員だと思います”

“《Zwei Ans? tze haben das Wort als (彼の言うとおり2名接近しています)》”

“・・・わかった結界を解除する、合図を頼む”

「聞いているのか？」

どうもシカトし過ぎたのが気に入らないのか執務官は杖をこちらに

向け先程のスフィアを生成する。

「なんですか？」

「大人しく武装を解除するんださもなくば力尽くで拘束する」

「へえ〜ならやってみればいいさ」

こちらも鈍色のスフィアを左の掌に造る

“ シグナム ”

合図を送り掌のスフィアを執務官に向けぶん投げる

《 P r o t e c t i o n 》

執務官の前に青い障壁が展開されるが・・・これは別に攻撃の魔法じゃないし

《 L i c h t s c h r e i 》

障壁に当たる直前に閃光と爆音が轟いた。これはスタングレネードをアレレンジして魔法で再現したもの失明もしないし鼓膜も破れないようにしている。

まあ少しの間目が眩んだり耳鳴りが止まらないけど。

「なっ!?! う、あああ・・・」

“ シグナム、結界を ”

そう言うとは結界は解除され何時も通りの空に戻る。

「天道、この決着はいずれ必ず付ける！」

「ええ望むとことですよ」

そのままシグナムは転送魔法で姿を消した。

《マスター我々も行きましょうか》

俺も追跡されない様に細工した術式で転送魔法を発動しこの場を後にする。



「クロノくん！」

わたしとフェイトちゃんが着いた時には全て終わっていました。

「クロノ大丈夫？」

フェイトちゃんも心配そうにクロノくんに近づく。

「なのはそれにフェイトか、ああ大丈夫だ、問題はない。だが両方に逃げられてしまった」

『クロノ本当に大丈夫？』

展開された空間モニターにリンディさんが映り心配そうな顔でクロノくんを声を掛けているんだけど、未だに空中に浮くこのモニターには慣れません。

「ええ、すみません艦長、捕縛出来なくて」

『いいえ無事で何よりよ、流石に守護騎士も居たしあなた1人での捕縛は難しかったわ・被害もない様ですし皆一旦こちらに戻ってもらえるかしら、なのはさんのお家には私から連絡を入れますから』

「「はいっ!」「」」

数十分後、フェイトちゃんのお家に着いてリビングにはリンディさん、クロノくん、エイミィさんがわたしの正面のソファに座っていてフェイトちゃんは隣に座っています。

ユーノくんとアルフさんは今、無限書庫という所で闇の書についての調査中です。折角ユーノくんが戻って来たのに殆どお話できません少し残念です。

「まず先程の戦闘の映像がこれです」

そういうとリンディさんは端末を操作し、するとモニターにシグナムさんともう1人は男の子・えっ!?

「「えっ!?!」」

「なのはちゃん? フェイトちゃんもどうしたの?」

「この男の子」

「なのはさんこの子の事知ってるの？」

だってこの子は・・

「なのは、フェイトも知っているなら教えてくれ、彼は誰なんだ？」

「う、うん、えっと知ってるとうかなんというか、ねえフェイトちゃん」

わたしがそういうと皆がフェイトちゃんに注目する。

「な、なのは、ワタシ達もそんなに話しをした事はないんですけど、クラスメートなんですワタシの隣の席で」

「そうなのか！君達と同年であれ程の戦闘を・・・で、彼の名前は？」

「天道くん、えっと下の名前は・・・」

殆どお話した事がないので余り覚えていませんでした、フェイトちゃんの隣に座っているからお話しようとするんだけど休み時間とかお昼時間になると何処かに行ってるみたいで全然お話できません。

「なのは、確かシュウだったよ」

「フェイトちゃん何で知ってるの！」

「えっ！？ 転校して来た時に教科書見せてくれた時に聞いたの、でも余り会話が續かなくてワタシも名前位しか知らないんだけど」

「じゃあ何処に住んでるのかもわからないのね？」

「すみませんリンディ提督」

「ううん、謝らないでいいのよ・・ねえ学校には来てるのよね？」

「？ええ、たまに居ない時もありますが、大体は来てます」

「そう、なら2人をお願いがあるの」

そうしてわたし達がリンディさんに頼まれた事は明日ここに天道くんを連れてくる事でした、でも大丈夫かなわたし天道くんと話した事余りないんだけど

「なのは大丈夫だよワタシが話しをしてみるから」

「フェイト余り無理はするなよ僕も見つからない様に学校の近くにいる、何かあれば直ぐに行く」

「ふうんクロノくんキッチンとお兄ちゃんしてるんだね、感心感心。なのはちゃん、フェイトちゃんも大丈夫だよ。あたしもサーチャー使ってモニターしてるからね」

「クロノもエイミィもありがとうでもいいの？ 闇の書とシグナム達の事は大丈夫なのかな？」

「それなら大丈夫よ、捜索なら武装隊の局員がいるし、もしかした

ら守護騎士が又、その天道君を狙うかもしれないし放っておけないわ」



管理局を撒いて家に着いた私は先程の天道との戦闘を思い返しつつレヴァンティンを磨いていた。

「・・・な、なあシグナム？アンタ何かあったん？」

「そうだぞシグナム、ホント何かあったんだろ？てーかそんな笑顔でレヴァンティン磨いてんじゃないよ、アタシ普通に怖えーし！？はやても皆も引いてるしよ！」

主はやてもヴィータも一体何をいつているのか。

「いえ、特にはただ、少し面白い少年に会いまして、ふっふっふっ」

再戦の誓いはした、次こそ心躍る戦いができる。テストロッサも悪くはないが騎士としては同じ剣士として天道との戦いは楽しい・・・いかん、つついにやけてしまう。

シグナムの様子をみてうちはちょうど不安になってしまった。

「シグナム以外全員集合や」

ヴィータ、シャマル、ザフィーラを集めて緊急家族会議や！

「みんなシグナムの様子どう思う？少年言うてるからもしかしたら

恋でもしとるんちゃうか」

「なあはやて、多分だけどそういうんじゃないわねえ気がするんだけどシグナムだし」

「いいえヴィータちゃん、シグナムだって女性ですものあり得ない事ではないわ」

我が家の若奥さまはうちと同意見らしいわ。

「主はやて、我はヴィータの言う通りかと大方シグナムが指南して
いるという道場の者かと思いますが」

うーんうちの番犬はヴィータと同意見らしいわ。

「我は狼です。では我がシグナムに直接確認して参りましょう」

そういつてザフィーラはシグナムの所に行ってもうた。

“シグナム一体何が有ったのだ主はやても心配しているぞ”

“ん？ああすまんな主はやてにはお話しは出来んが、先程蒐集し
ようとした少年と戦闘になってなこれがまたなかなかの腕でな勝負は
つかなかったがな”

“主にはお話し出来んなこれは。まあこんな事だとは思ってたが主
は我から話しておく”

“ああ頼む”

ザフィーラがシグナムから話しを聞いて説明してくれたんやけどヴ

イータやザフィーラの言う通りやった。

「うーシグナムにもやっと春が来たと思ったのに残念だわ」

うちも残念やわシグナムにも、ううんシグナムだけやない。うちはみんなには幸せになって欲しいんや、だってこちらは家族なんやから。願わくばずっとこんな日が続いて欲しい。

そう思いつつ今日も夜が深けて行く。

闇の書編 第2話

シグナムとの戦いの翌日、教室に入り席に座ると

「おはよう天道くん」

隣の席のテストロッサが挨拶してきた。

「ああ、おはようテストロッサ」

少し話しをしていて気付いたがこいつは天然だと思っていた。が今日、俺はこいつ本物だと確信した。何せ朝イチで爆弾を落としてくれたから

「えっとね、今日の放課後暇かな？」

今思えば、この日休んでいればあんな事にならなかったのにと、そして何故今日に限って予定が何もなかったのか。

「ん？特に何もないけど、どうかしたのか？」

「えっと、お暇なら今日私の家にきてくれないですか」

その時、教室の時間が止まった！

今は朝、授業が始まる前でクラスメイト同士でおしゃべりしている者も多くいた筈だが。その全てが止まった、教室は静寂に包まれ、そして爆弾を投下した本人によってそれは破られた。

「どうかな？私は是非来て欲しいんだけど」

コイツは俺に恨みでもあるもだろうか！？テストロッサはこのクラスだけではなく何気に学校中で注目されている。

転校生という事もあるがそれよりもその容姿だ、綺麗な金髪に透ける様な白い肌、人を惹きつける紅い瞳。お世辞抜きでも綺麗な子だと俺も思う・・・天然だが。テストロッサが俺の隣の席になった時もクラスの半分つまり男の子から敵意が向けられたが今は、殺気？・じゃねーなこれは瘴気が漂ってきてるし。

「「「てゝんゝどゝうゝ」」」」

お前らそんなにテストロッサが気になるのか！？

俺はここ迄瘴気を出せるお前らのこの先の方が気になるんだが。

“《マスター教室にいるのは危険かと》”

“ああとつとと逃げるよ”

「ねえどうかな？」

この状況に気が付いていないお前は凄いや、イヤホントに。頼むから気が付いてくれ、お願いだから！

・・・そして時間制限無しの鬼ごっこが始まった。・・・気が付けばクラスの男だけじゃなく学校の男子生徒の4分の1程の人数に追われ、それは追っ手の体力が尽きる迄続いた。

そして俺はこう思うのだ、出来ればテストロッサには係わり合いたくはないと！



わたしは今までフェイトちゃんの事を純粹な子だと思っていましたがどうやら違う様でした。

フェイトちゃんは天然でした、フェイトちゃんの『お家にに来て欲しい』という発言でのお陰で教室から逃げ出した天道くんを追いかけて、クラスの男の子が全員居なくなりましたマル

「え？どうして教室から走って出て行ったの？そんなに嫌だったのかな？」

フェイトちゃんは涙目になってるけど、今泣きたいのは天道くんだとわたしは思うの！

「ふえ、フェイト！？アンタあ、朝から一体何を言ってるのよ！」

「そ、そうだよフェイトちゃんどうしたの？」

アリサちゃんもすずかちゃんもどもってるよ事情を知らなかったらわたしもそうなると思うけど。

「え？私何か変な事言ったかな？」

「変な事じゃないけど、朝の教室で言う事じゃないわね」

「そうなの？アリサ」

「ええフェイト、アンタの発言の結果がこの状況よ」

と、アリサちゃんは男子生徒の居なくなった教室を指すけど、アリサちゃん多分フェイトちゃんは解ってないと思うよ。

「えっとねフェイトちゃん。女の子が男の子をお家に呼ぶというのはね」

すずかちゃんが説明してくれて助かったけど2人をどうやって誤魔化そう、魔法の事は話せないしうん何かないかな！？

「なのはくどうしよう天道くんに迷惑かけちゃったよ」

「えくと・・・だ、大丈夫わたしも一緒に謝るからフェイトちゃん。だから泣かないで」

「でもフェイトちゃんどうして天道君をお家に呼ぼうと思ったの？」

・・・どうしようフェイトちゃんじゃ多分誤魔化そうにないよねわたしが頑張らないと。考えるの高町なのは・・・あっ！？これなら！

“フェイトちゃん”

“なのはくどうしよう！？”

“わたしに考えがあるのフェイトちゃんいい？……という事をなら大丈夫”

“うん、ありがとうなのは”

「えっとね、天道くんには教科書見せてもらったり色々お世話になったりした事をリンディさんに話したら是非お礼がしたいっていうから」

「そうなんだリンディさんってフェイトちゃんの保護者だもんね心配だったのかな」

「そういう事ならわかるけど、話しをする場所は選びなさいよ本当にビックリしたんだから」

な、何とか誤魔化せた！



結局お昼迄逃げまわる羽目になったよその後で説教されたけど、どう考えても俺は被害者だと思う。

追っ手は全員潰したし（非武力で）お昼は平和に過ごせそうなんだが、ただ出来れば人のいない所でご飯を食いたいし……屋上なら大丈夫かな寒くなって来たし余り人もいないだろう。

「あー居た！ほら、フェイトーここに居たわよ天道！」

あー屋上に来て速攻で平穏が破られた。厄日ってやっぱり一日続

くだね。

声がした方に振り返ると、ブラウンの髪の子に栗色、紫に金髪が居たけど・・・誰だっけ？

「アンタ、寒くなってきたのに何でこんな所でご飯食べるてるのよ。まあいいわフェイトがアンタと話したいからって捜してたのよ。ほら、フェイト」

弁当箱を持ってこちらにくるテストロッサと他3名。

「て、天道くんさっきはごめんなさい。いきなりあんな事言って驚いたよね」

「驚いたというよりも身の危険を感じたよ。実際さっき迄追いかけてた上にお説教もいただいたし」

そう言うテストロッサの目がどんどん潤んできて涙目になる。あれ？事実を言っただけなんだが、3人の視線が冷たくなった。

「アンタねーそんな言い方しなくてもいいじゃない」

「そうだよフェイトちゃんも謝ってるのに酷いの」

「天道君！そんな言い方ないと思うよ」

視線だけじゃなく糾弾もされました。

というよりなに！？このフルボッコ状態は！あんな風追われたら、一言くらい言いたくもなるよね。それよりもきになるのが。

「というより、キミら誰？」

「「「えっ？」」」

「ちょっとクラスメイトの名前知らないってどういう事よ！」

「俺が転校して来た時に自己紹介なかったんだから解る訳ないでしようが」

「「「あ!？」」」

俺が転校して来た時、丁度テストとか学園祭が重なって転校の挨拶をしただけで後は、うやむやになっていたんだよ。だからクラスメイトの名前も殆ど知らなかったりする。

「そういえば、そうだった気がするわ。あたしはアリサ・バニングスよ」

「た、確かに、わたしは高町なのはです。よろしくね天道くん」

「私は月村すずか。ごめんねお騒がせして」

と言いながら弁当を広げはじめた。もしかしなくてもここで食べるつもりか？よし、じゃあ。

「そこ、待ちなさい。アンタどこ行くのよ」

「人の居ない所で食べるんだけど、何か？」

「何でよ一緒に食べればいいじゃない。それにあたし達みたいな可愛い子とご飯食べれるのよ光栄に思いなさい」

自分で可愛いって言うなよ。まあ確かにそうだけど、しかしだからこそ危ないんだけど。

“《この方達さっきマスターが追われた理由、解ってないんでしよ
うか?》”

“そうなんだよね。テストロッサだからじゃなく、この4人なら同じ事を言われても多分追いかけていたし”

「だが断わる」

「だから何でよ」

「俺はさっきみたいなのはもうごめんなんだけど」

「んー天道くんどうしたのよくわからないの」

「「あーなる程」」

バニングスと月村は気付いくれたか、察しが良くて助かるよ。

「じゃあ、そういう事で」

「だから待ちなさい。あんなの気にしなくていいじゃないの男でしよ」

男だから追い回されたんだが、それにこの状況を目撃されたらさっ

きよりも人数が増えそうな気がするんだけど。

「ほら、座りなさい。今から場所探してたら食べる時間無くなるわよ」

「そうだよみんなで食べた方が楽しいよ」



結局押し切られるまま5人で食べる事に・・・不幸だ。

“《はたから見ると、ハーレムに見えるのが不思議ですな》”

“ああ瘴気を出す男子生徒に追われるのを想像しなければ楽しいのかもしれないけど”

「アンタの弁当ってやっぱりお母さんに作って貰ってるの？」

「ん？いや、自分で作ってるけど」

「」「」「えっ？」「」

「冷凍食品とか使えば誰でもできるよ」

「お母さんは作ってくれないの？」

「俺の身内は爺さんだけだけど、母親と父親は見た事ないし」

「」「なのは（ちゃん）！」「」

「」「ごめんね天道くん。わたし何も知らなくて本当にごめんなさ

い」

「？何を謝るのかわからないんだが。．．．あーなる程、親が居ないって事か？気にしなくていいよ。会ったこともないと思うことも特にはないから。」

それにしてもバニングスと月村の弁当はやたらと豪華だな随分手が込んでるし親が作ったのか？」

「え？あ、ううん家はシェフが作ってくれてるから」

「家もメイドさんが」

何か聞き慣れない単語が、シェフにメイドって自分家には？

「えっと、アリサちゃんとすずかちゃんのお家はとても大きいから」

「バニングス、月村、友達になってくれ！」

「な、なによいきなり」

「そうだよ天道くん突然どうしたの？」

「それよりもどうしてアリサちゃんとすずかちゃんだけに言うの？なのはとフェイトちゃんには言ってくれないの？」

「高町、かつて武闘派の少年探偵が言っていたよ」

「な、なにかな」

「『貧乏人は土に帰れ』と」

「「「・・・・・・・・」」」

「酷いよーそれに普通家に帰れって言うんじゃないかな」

「えっと、家は結構お金あるけど」

「フェイトちゃんも何で普通に応えちゃうのかな!? というよりそういうのでお友達になるなんてだめだよー」

「あ、アンタねーいきなりぶっちゃけすぎよ、欲望が見え過ぎていつそ清々しいけど」

「そういうのはちよっと」

「テストロッサ、そうなのか? なら友達に「そこ拾っちゃうのおかしいから」高町、まだいたんだ」

「ひ、酷いの、ぐす・・・」

何故か高町が泣き出した。

「所でテストロッサさっきのは一体どう言うことなのかな? 」

「ちょっと天道、なのは泣いてるんだけど、どうするのよ」

「放置で、大丈夫俺は気にしてないから」

「気にしなさいよアンタはそんなだと友達できないわよ。少なくともあたしはごめんよ」

「ちっ！仕方ない、あー高町悪かった悪かったから泣き止め。ここにいいから」

「ぐす．．．本当？なのはとも、お友達になってくれる？」

「．．．．．」

「ぐす、ぐす、うああーん。酷いの」

「．．．あゝ解った、解ったから。高町だから泣くなよ」

「ぐす．．．なのは」

「は？」

「な、の、は」

「何を言っている」

「だからなのは、だってば」

「知ってる今聞いてばかりだし」

「天道、なのはは友達なら名前で呼んで欲しいって言ってんのよ、あたしもアリサでいいわ」

「面倒な、（だから貧乏人は困る）」

「アンタ、声に出てるわよ」

「あゝすまんつい本音が、もう泣き止んでくれ・・・なのは」

「ぐす・・・うん！」

「天道君、私もすずかでいいよ」

「私もフェイトって呼んで欲しい友達なんだし」

「ああ、でテスト、フェイト、

家に来いとはどういうことなのかな？そもそもそれが原因なんだけど」

「あ、そうだったね。ごめんねえっと、転校したての時に教科書とかみせてくれたり、色々お世話になったからお礼がしたくて、後、私の保護者の人も是非って言ってて、ダメかな？」

背の高さが同じなのに上目遣いって器用だね。あと涙目も止めてくれるかな！俺が何かやったみたいだし、ほら3人の視線がまた、厳しくなってきたるし。

「うん、お断り。」

「・・・・・・」

「だから、何で断わるのよ。いいじゃない家に行く位、全く根性ないわね」

「それよりも、そんな事でお礼とか言うのはおかしいでしょ、教科書見せるのだって隣なんだから当たり前じゃないかな」

「あーなる程確かにそうね、それじゃあ友達の家に招待されたって思いなさい」

“《マスター、バニングス嬢の言う通りにした方がいいですよ。テスタロッサ嬢の目もそろそろ決壊しそうですし、先程の事が在るにしてもいくらなんでもこれは非道ですぞ》”

“さっきの事はもういいんだけど、どうにも嫌な予感がするんだよ。行ったら何か逃げられなくなりそうで”

“《考えが過ぎでは？ただテスタロッサ嬢の家に行くだけですぞ何か起こるとは》”

“うーん考え過ぎかな”

数年後、ふとこの事を思い出し振り切れば良かったと思う事になる。

「あー行くからそんな捨てられた犬みたいな目で見ないで」

「うん、ありがとう。放課後家に案内するね、シュウ」

「ああ、って！いきなり下の名前！」

「うん、なのはがね友達ならキミとかあなたじゃなくて名前で呼び合うんだって言ってたんだけど、だめだったかな」

「いや、だめではないが、それは高町の理論であって決して一般論ではないことは言っておくよ。友人同士でも苗字で呼び合うことも珍しくないない」と聴いているよ」

「確かにそうなんだよね。でもなのはちゃんらしい、いい言葉だね」

「そうだアンタ、さっきのお金持ってるから、友達になりたいみたいなこと言ってたけど。お金があれば何でも出来る訳じゃないのよ解ってるの？」

「失礼なそんな事解ってるよ、そうお金は全てじゃない・・・ほんどだよね」

「「「!?!?!?!?!」」」

「・・・アンタ、それ小学生の考えじゃないわよ今からそれはまず過ぎでしょうが」

「そうだよシュウ君、というよりそんなにお金が好きなの!?!」

「それに、アリサちゃんやすずかちゃんに頼っちゃだめだよ。きちんとお仕事しなきゃだめなの」

「ただなーお金を稼ぐって大変なんだぞ君らは知らないんだろうけど、『命掛けだし』」

「まあ、大変なのはわかるわよ。あんた働いた事あるの? って!?!? 命掛けて何? そんな仕事普通は聴いたことないわよ」

「ん? 爺さんと旅してた時はそんな感じだったけど」

「だからどんな仕事よそれ」

「んー路銀がなくなったからどっかの邪教教団から宝物掻っ払って追われたり悪徳マフィアから金品強奪して銃火器撃たれたりUMAを狩に行つて未確認生物に追いかけられたり、歌手の護衛してストーカーと戦闘になったりかな」

「胡散臭いわね特に3番目の未確認生物って何よUMA狩るって何なのよ」

「それは適当に言ってみた」

「アンタねー会話の中にナチュラルに嘘を混ぜてんじゃないわよ。つて！じゃあそれ以外はホントなの？」

「あぁうん」

「・・・碌な人生歩んでないわね。それに仕事と呼べそうなのは最後だけじゃないの前の2つは明らかに非合法もいいところじゃない」

「何を言っているの？いい、かつて有名で偉大な方がこう言ってた『悪人に人権はない』とな。」

それと小学生が人生を語らないでくれ、大丈夫まだ俺は大丈夫だ。そうだからこそ、将来の為に貯蓄を増やすんだー」

その後、人生についてアリサ、すずかに高町から語られた。こいつらの考えも小学生じゃないと思うだってそこの大人と変わらないもの、あれですよ、体は子供頭脳は大人みたいな。

ちなみにフェイトは年相応だった為によく解らない様だった。

5人で教室に戻ると、また、鬼ごっこが始まった。後で解った事だがどうやらアリサ、すずかに高町は前から男子生徒に人気があったらしい。何となく解ってはいたがここまでとは思わなかった、さつきよりも人数増えてるし。

“《マスターこの学校の生徒はおかしいでしょ絶対に子供とは思えませんよ》”

“だ、だよね普通じゃないんだよね。何か前に邪教教団に追われた時と同じ感じがするよ、ほら目とかのハイライト消えて物騒な規制音になる様な事口走ってるによ”

“《マスター噛んでますぞ、まあ解りますが》”

後ろから飛んできくカッターやらコンパスを避けながら逃げて行く。このまま午後の授業が終わるまで逃げ続けた。

・・・あつ、今日授業受けてない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0141z/>

鋼の魔導師 Stahl Zauberer

2011年12月2日20時50分発行